

京都大学大学院文学研究科 21世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

規範性と多元性の歴史的諸相

Canone Newsletter

No.1

2003/02/03

Contents

研究課題：規範性と多元性の歴史的諸相	/	2
研究会メンバー	/	2
研究会および調査報告		
平安後期仏教美術の諸相	/	3
レンブラント・コロッキウム “Rembrandt as Norm and Anti-Norm”	/	4
本山慈恩寺の实地調査	/	6
近世と中世における倫理学的思想の多元的な特質	/	6
今後の活動予定	/	9
Canone	/	10
お知らせ	/	10

研究課題：規範性と多元性の歴史的諸相

われわれの研究会は、現代世界において、たとえば伝統文化の「多様性」・「多元性」とグローバル主义的「一元性」・「普遍性」の相克に見られるような、両者の対置をすぐれて基本的な問題ととらえて、その本質を歴史的諸事象に遡行して検討し、本来あるべき調停の方向への示唆を得ることに努める。研究は、当初次のような二つの視点を設定してこれまでの研究成果の蓄積に立った問題集約に努めつつ、漸次議論の総合化を図っていくものとする。シンポジウム・研究会などは原則として合同で開催し、相互の意見交換を積極的に行うことで、思想・文献研究と図像中心の研究との結合にも取り組む予定である。

哲学知の継承と変容： 異文化とのたえざる接触・融合の中で、多様な事象への関わりが哲学知へと収斂していく過程、および世界の多様性への認識においてそれが活性化されつつ展開されていく過程の解明、西洋中世スコラ哲学においてキリスト教信仰を前提とした哲学知が、「異他的なるもの」特にアリストテレス哲学とどのように接触しそれらを受容して

いったかの解明、ヨーロッパ近世、とりわけ17世紀の啓蒙思想において非ヨーロッパ世界との出会いが何をもたらしたかの解明などに重点を置き、世界の多様性の中で哲学知がいかに変容しつつ確保されていくべきかを探る。

藝術作品における規範と創造： 過去の美術の世界においては、洋の東西を問わず、規範とされる作品が存在し、美術家たちは、それらの作品を手本としつつ創作を行うことが求められてきた。その一方で、規範は、しばしば、藝術の自由な展開を拘束する足枷とも見なされ、美術家たちはそれに反発を覚え、より自由な作品の創造へと向かったのである。しかし、元来は規範への反発から生み出された作品も、後世に新たな規範としての地位を獲得するというものも決して珍しくない。こうして多様な規範が存在するようになるのである。こうした視点から、西洋におけるイタリア美術と北方美術との関係、および、日本における和様彫刻ならびに狩野派絵画と中国美術との関係などの具体的・歴史的事例に即して、規範の作用と反作用の交錯の場としての創造の力学を考察する。

研究会メンバー

リーダー

内山 勝利 本学・教授(ギリシア哲学)

メンバー

川添 信介 本学・助教授(西洋中世哲学)

佐々木 丞平 本学・教授(日本美術史)

中畑 正志 本学・助教授(西洋古代哲学)

中村 俊春 本学・助教授(西洋美術史)

根立 研介 本学・助教授(日本美術史)

福谷 茂 本学・助教授(近世哲学史)

浅沼 光樹	龍谷大学非常勤講師(近世哲学史)	周藤 多紀	セントルイス大学大学院在学(中世スコラ哲学)
井澤 清	本学非常勤講師(中世スコラ哲学)	平川 佳世	近畿大学文芸学部・講師(ドイツ美術史)
稲本 泰生	奈良国立博物館・研究員(中国美術史)	村上 正治	研修員(ギリシア哲学)
大草 輝政	日本学術振興会特別研究員(ギリシア哲学)	劔持 あずさ	研究会補佐員(イタリア美術史)
木原 志乃	日本学術振興会特別研究員(ギリシア哲学)	和田 利博	COE 研究補助員(ギリシア哲学)
國方 栄二	本学非常勤講師(ギリシア哲学)		

研究会および調査報告

テーマ

平安後期仏教美術の諸相

開催日時

2002年11月21日(木)午後3時～6時

場所

京都大学文学部美学美術史学研究室

発表題目および発表者

「平安後期の経典見返絵の構造の分化とその展開」

緒方知美(日本学術振興会特別研究員)

「山門の秘法 四天王法の成立 - 滋賀県常楽寺蔵 『釈迦如来及四天王像』をめぐって - 」

松岡久美子(栗東歴史民俗博物館学芸員)

概要

本セクションは、「和様」というわが国独自の美術規範が成立したと繰り返し語られてきた平安後期の美術史観の再検討を目指している。今回は、二人の若手研究者に、経典見返絵と仏画の図像という観点から平安時代の仏教美術に関わる発表をしていただいた。各発表の概要は、以下の通りである。

まず、最初の緒方氏の発表は、経典の見返しを通して平安後期の絵画史の再検討を試みている。平安時代の装飾経は数多く現存するが、その中心となるのが、10世紀頃から認められる紺紙金字法華経で、平安後期に入る遺品は40件を超えている。法華経説話画が自然の風景を伴って描かれるのを常とする当時の紺紙金字法華経見返絵は、東アジアに広がる法華経説話画の展開という図像学的観点からだけでなく、平安

時代における風景表現の展開の観点からも重要な研究対象になる。とくに、11世紀半ばの平等院鳳凰堂壁扉画や京都国立博物館山水屏風(11世紀)に代表される絹本や板地の障屏に彩色された大画面絵画とは異なる紙本に線描で描かれた小画面説話画が、どのような空間構成の展開をたどり、どのような特質を持つに至るかという過程を、見返絵を通して具体的にたどることも可能かと思われる。

氏の発表は、こうした観点から、改めて滋賀・百濟寺本、岩手・中尊寺一切経といった当代を代表する法華経見返絵を取り上げ、さらに大英博物館版本金剛般若波羅蜜多経(中国・宋、868年)といった大陸の作例にも目を配り、平安後期の見返絵の展開について再検討を試みた。結論として、わが国平安後期の経典見返絵は、新局面を拓くことのなかった大陸の見返絵と対照的に、空間構成の変化や画題の限定という問題によって、小画面説話画としての成熟を遂げたとする。さらに、氏は経典見返絵と絵巻の関係にも触れられ、きわめて刺激的な発表を行われた。

続く、松岡氏の発表は、滋賀県常楽寺に伝えられる鎌倉末期頃に制作されたとみられる「釈迦如来及四天王像」(重要美術品)を取り上げ、天台宗独特の図像が何故、平安末期後白河院政期頃に再評価され、鎌倉

時代にこのような画像として描かれるにいたったかを考察した。

氏は、まずこの画像の図像等の検討から、中尊の釈迦如来像の印相が初門の釈迦、すなわち叡山西塔釈迦如来像の姿を表すもので、四隅の四天王像は、聖徳太子の物部守屋討伐のエピソードと結びつく、四天王寺様の四天王像であるとし、この画像が『門葉記』『阿婆縛抄』等に山門の秘法として記される四天王法の本尊となる遺例稀な画像であることを明らかにされた。そして、こうした特殊な四天王法は、叡山では後白河院期に新たに登場してくると推測されるという注目すべき点も指摘された。

白河、鳥羽、後白河と続く、平安院政期には、しばしば新奇な尊像を本尊とする修法が流行したことはすでにしばしば指摘されているが、山門の四天王法は、日本国内の伝承に題を取り、既存の修法を再評価し、新たな修法として誕生したものと言える。こうした修法のあり方は、やはり院政期仏教の性格の一面を良く表している。常楽寺本は、この修法が誕生してから少し時間を経た時期に描かれたものであるが、平安時代末の院政期の美術の諸相を考える上で貴重な遺品と言えよう。

テーマ

レンブラント・コロッキウム

"Rembrandt as Norm and Anti-Norm"

開催日時

2002年12月15日(日)午後1時から

場所

京都大学文学部新館第1講義室

発表題目および発表者

"The Backgrounds of Rembrandt's Paintings -Their Function and Meaning"

小林頼子（目白大学助教授）

"Rembrandt's *Andromeda*"

中村俊春（京都大学助教授）

"Rembrandt and the Melancholy"

尾崎彰宏（東北大学教授）

"Rembrandt as Portrait Painter and *The Anatomic Lesson of Dr. Deijmann*"

Norbert Middelkoop（アムステルダム歴史博物館学芸員）

司会：平川佳世（近畿大学講師）

概要

17世紀オランダで活躍したレンブラント（1606-1669年）は、西洋美術史上もっとも偉大な画家の一人として高く評価されている。しかし、一方で、彼の芸術は、その過度な自然主義的描写ゆえに、美の規範からの逸脱として、古典主義者たちによって、しばしば、厳しく批判されてきた。平川の司会により開催された本コロッキウムでは、四つの研究発表を通して、さまざまな視点からの、彼の芸術の再検討が試みられた。

小林は、レンブラントの絵画における背景の表現法に着目して、その構成の特徴を詳細に分析した。その際、ファン・マンデルやライッセなど、17-18世紀のオランダの美術文献に述べられた"doorsien"（見通し空間）などの構図構成に関する用

語が検討され、レンブラント作品との関連が明らかにされた。中村は、レンブラントが制作した最初の神話画である《アンドロメダ》を取り上げて、その主題の表現がきわめて特殊であること、人体表現における優美さの欠如などを指摘した。そして、レンブラントがバルタザール・ジェルピエのホルツィウス追悼詩に刺激されてこの絵を描いた可能性について指摘した。尾崎は、レンブラントの手になる自身および妻サスキアを描いた数多くの絵画や素描において、手に顔をのせて肘をつくという伝統的なメランコリー気質のポーズが認められることに着目して、レンブラントとメランコリーの問題に関する詳細な考察を行った。芸術家にとってのメランコリー気質の意味、さらにはデューラーとの関連が詳しく論じられた。ミッデルコープは、《デイマン博士の解剖学講義》が外科組合を飾る絵として如何なる特徴を有していたのか、同時代ならびに後世の作品との比較を通じて明らかにした。また、レンブラントが、肖像画において、それまでの図式的な表現を打破し、時間性を導入することに成功したことを多彩な作品に基づいて論じた。

ミッデルコープをアムステルダムから招いた国際コロッキウムという性格上、発表ならびに質疑応答はすべて英語で行われたが、来聴者からも数多くの質問が出て、長時間に及ぶ熱気あふれる研究会となった（13時から始まった会が終了したのは20時前のことである）。なお、このコロッキウムの研究発表を集めた論文集が、2003年末に刊行される予定である。

調査対象

〔重要文化財〕木造騎獅文殊菩薩及脇侍像4軀、木造騎象普賢菩薩及十羅刹女像5軀

日時

2002年12月20日、21日

場所

山形県寒河江市本山慈恩寺

調査参加者

根立 研介（本学・助教授）

皿井 舞（美学美術史学D3）

山内 舞子（美学美術史学M1）

調査概要

本山慈恩寺当局の協力を得て、実査を行ない各像の詳細な写真撮影を行った。

調査物件の概要

現在、本山慈恩寺の本堂の宮殿内に安置されている群像で、いわゆる五台山文殊化現像の一群と、普賢菩薩に法華経持者の守護尊十羅刹女とを組み合わせた一群からなる。一部の像が失われているが、おそらく当初は釈迦如来像の脇侍群像として平安時代末頃に造られたものとみられ、その中尊像については現在阿弥陀堂に安置されてい

る阿弥陀如来像を当てる見解もある。

文殊（像高37・6cm）・普賢（像高37・5cm）の二菩薩像は、ともに檜材を用い、一木割矧造りの技法で造られ、表面を彩色と切金文様で装飾している。この二菩薩の乗る獅子や象については、概ね当初の姿が保たれている点は注目される。一方、文殊菩薩の脇侍像（像高39・5～42・3cm）も用材はいずれも檜を用いるが、造像技法は優填王像については一木割矧造り、他像については一木造とし、4軀とも彩色仕上げとする。十羅刹女像（像高36・5～41・7cm）は、檜材を用いた一木造りの技法で造られていて、表面はいずれも漆箔、彩色、切金文様で装飾している。

引き締まった顔立ちや、漆箔の上に彩色、さらには精緻な金銀の切金文様を施すような入念な加飾の仕方は、平安末期の京都の仏像表現や装飾法がほとんど時を置かずにこの地にもたらされたことを示す。当代の仏教美術の伝播の問題を考える上で重要な遺品であり、また中国に源を発する五台山文殊の日本に於ける受容を考える上でも見逃すことの出来ない遺品である。

テーマ

近世と中世における倫理学的思想の多元的な特質

開催日時

2002年12月24日（火）午後2時～5時

場所

京都大学文学部新館第7講義室

発表題目および発表者

「ショーペンハウアーにおける禁欲の体現者としての「聖人」 その倫理学において持つ意義について」

多田光宏（西洋近世哲学史D3）

「徳と認識 トマス・アクィナスにおける親和性による認識」

周藤多紀（中世哲学史 OD / セントルイス大学）

司会：川添信介

概要

「ショーペンハウアーにおける禁欲の体現者としての「聖人」 その倫理学において持つ意義について」

ショーペンハウアーの主書『意志と表象としての世界 正編』において、アシジの聖フランシスコは「禁欲の真の人格化」と評されてはいるが、ショーペンハウアーにおける禁欲は、キリスト教における完徳の方法ではなく、ある個人が「聖人」であることの徴表である。従って、ショーペンハウアーにおける禁欲は、キリスト教的な意味においてだけでなく、日常的な意味においても用いられているような、何らかの目標を達成する為の方法としての努力を意味しているのではない。禁欲は、努力をその根本的な性格とする意志の否定を先行体験としてのみ可能となる。この禁欲の体現者である「聖人」は、キリスト教における聖人ではなく、「意志の否定」の体現者である。

ショーペンハウアーは「聖人」を倫理学において扱うが、有徳者とは区別する。有徳者とは、苦痛を契機として形而上学的な意志において自他を同一化し得る者であり、「自分と他人の苦しみとの間に均衡を作り出そうと努め、他人の苦しみを緩和する為に喜びを諦め、不足を忍ぶ」者である。有徳者は、形而上学的な意志において、現象的により大きな苦痛を避けようとする。し

かし、それは苦痛の平均化をもたらすだけであり、苦痛からの完全な解放をもたらさない。

それに対して、世界の真相が苦痛であることを自らの苦痛の極限状態において直接的に確信することによって、「諦め」という仕方ですべての努力を放棄する者が「聖人」である。ここにおいて「意志の否定」という体験が生じ、意志と不可分であった苦痛からの完全な解放がもたらされる。しかし、「意志の肯定」と身体の存続は本質的に同一のことなので、その体験は持続しない。それ故に、「快適なものの拒否と不快なものの追求によって意志を意図的に挫く」という禁欲が生じる。即ち、解放の体験の契機となる苦痛の極限状態にその身を置き続けるということが、ショーペンハウアーにおける禁欲の本質なのである。このとき、苦痛は避けられるべきものではなく、迎え入れられるものとなる。このことが意味しているのは、禁欲を体現する「聖人」が苦痛という感情を核心とする有徳者を越えており、苦痛を唯一の意味とする方法とは全く異なる仕方ですべて世界を捉え得る可能性を示唆しているという意義を持っているということである。このことによって、「聖人」は、倫理学において、道徳にその限界を自覚させる役割を果たすのである。

「徳と認識 トマス・アクィナスにおける親和性による認識」

トマス・アクィナスは正しい判断に至るのに二つの道があると主張している。一つは「理性の完全な使用による」ものであり、もう一つは「(判断する)対象との親和性 (connaturalitas)による」ものである(S.T. - , q.45,a.2,c.)。後者の認識様態につい

ては、次のような事柄がその具体例として考えられている。

(a)「貞潔の徳をもっていれば、貞潔さに関わる事柄へのある種の親和性によって、そのような事柄を正しく判断する。」(S.T. - , q.45, a.2,c.)

(b)「より大きな愛徳があるところにはより大きな欲望があり、その欲望は、何らかの仕方で、欲望する者をして、欲されているものを受容するにふさわしく、かつ準備された者とする。したがって、より愛徳をもつものは、より完全な仕方で神を見、より至福なものとなるだろう。」(S.T. , q.12, a.6,c.)

これらのテキストは、認識主体が有する徳が、我々の倫理的そして宗教的知識の獲得において重要な役割を果たすことを示唆している。そこに見てとられるのは、ある徳を有するものは、その徳が関係する対象を認識するための適応性を有し、その適応性によって、対象を正しく、あるいはより優れた仕方で認識するという認識論的構図である。

親和性による認識の概念は、倫理的・宗教的認識の個別性や情意性にふさわしい説明を与えるように思われる。親和性の有無によって各人の認識の様態は異なるはずであり、トマスによれば、親和性とは一種の「愛」であって、「愛」は、愛する対象への「欲望」をもたらし、さらにその欲望が満

たされる時には「喜び」をもたらすからである。「親和性」による判断が「理性の完全な使用」ないしは「理性による探求」によってなされる判断と対置されていることから、親和性の認識の非推論的性格が伺える。理性のメルクマールは推論にあるとされているからである。このように我々の認識、とりわけ倫理的、宗教的認識が個別的であること、情念と強い結びつきを有すること、また非推論的(non-inferential)でありながら正当化されうることは、現在、米国を中心に盛んになりつつある「徳認識論(virtue epistemology)」が、従来の現代知識論に比した場合の、その理論的優位性として強調する諸点である。したがって、トマスの「親和性による認識」は、今日の哲学界の文脈においても十分に注目すべきものを含んでいるように思われる。

本発表では、まずトマスの「親和性」の概念の用法を分析し、続いてその「親和性」が我々の認識において、どのような仕方で関与するかを解明した。さらに「親和性による」と呼ばれる認識が、倫理的・宗教的認識の場面において、「正しい理性の使用による」認識とどのように異なっており、それがどのような哲学的意義を有するかを考察した。

今後の活動予定

2月19日(水) 研究会「近代日本絵画における伝統的規範の伝承」

於:文学部新館第6講義室 午後1時から

研究発表:ジョン・ショスタック(米国ワシントン州立大学大学院博士課程)
「秦テルヲのモダニスト伝画」

3月12日(水) 研究会

於:芝蘭会館 午後2時から

研究発表:山内志朗(新潟大学人文学部教授)
「西洋中世における異文化受容と知の多元性」(仮題)

3月15日(土) 研究会

於:京大会館212号室 午後2時から

研究発表:平川 佳世(近畿大学講師)

「規範としてのデューラー:ルドルフ二世の宮廷における北方ルネサンス美術の受容と翻案」

展覧会報告: 剣持 あずさ

「ティツィアーノ展(2月19日~5月18日於:ロンドン・ナショナル・ギャラリー)」

Canone

Canoneとは、本研究会の研究テーマの鍵概念である「規範」を表わすイタリア語です。語源は古代ギリシア語の **κανον** で、こちらはもともと真っ直ぐな棒を意味し、そこから物指しや定規、そして比喩的に基準、規範、規範的原理などの意味になりました。しかし、たとえばキリスト教史の中では聖書の正典や聖者録などを意味するように、何を模範や規範とするのかは時代と状況によって異なります。さらに現在では、この言葉は音楽の技法や活字の種類まで、多様な意味をもっています。このように Canone という言葉は、規範性を意味するだけでなく、その内実が歴史的に規定されていることをも示し、そしていまやそれ自身が多様性・多元性を具体化しているのです。われわれの研究も、過去および現在の思想や芸術におけるさまざまな規範やモデルの分析を通じて、そこに具現している文化や歴史との関わりと多様な精神活動のあり方を明らかにすることを意図しています。最後に、なぜイタリア語なのか？じつはイタリア語の Canone には英・独・仏語では不在かすでに廃れてしまった、しかしきわめて現代的な意味が生きのびています。すなわち(定期的に払う)納付金、料金。たとえば受信料。われわれは、規範の成立を可能とした社会経済的条件、そして現在の日本における COE プログラムの経済的意味についても、注意深くありたいと願っています。

お知らせ

このたび、ようやく Canone ホームページを開設いたしました。ニュース・レターでは紹介しきれない研究会や調査に関する情報を、随時更新していきたいと思っております。これからも、Canone をどうぞよろしく願いいたします。

<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/canone/>